
英雄になろう！！（自作自演で）

ふぉっち

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

英雄になろう！！（自作自演で）

【Nコード】

N6383V

【作者名】

ふおっち

【あらすじ】

ちよつとだけ厨二病入っちゃってる主人公は漫画やアニメを見ていて思うことがある。

主人公に、英雄になりたいなあ。

だってあそこをこうしたらもっとかっこいいのにかと思うこと一杯あるじゃん！とか思ってたら神様が現れて神様の力でパパッとゲームのような異世界に！しかもチートな能力付き！！こうなりややることは一つ。自作自演で英雄になる！

Prologue (前書き)

小説を読むのが好きなので、書いてしまいました。書くのは初めてです！

拙い文章ですが読んでいただけると幸いです。

Prologue

「あゝ英雄になりたいな」

学校帰りの道を歩きながらそう呟くのは俺こと浅倉海斗。

高校一年生の十六歳。

趣味は漫画、ゲームに関するのなら何でも。

特技はキャラクターになりきって妄想すること。

これには自信があり、なぜなら授業中すべてをフルに使ってあれやこれやを妄想して妄想力（想像力ではない）を養っているからだ。

おかげで妄想しているときは先生の注意も気付かないほどだ。

「またお前そんなこと言っただけ……」

俺の幼なじみの神崎瞬がそう俺にいつてくる。

「英雄英雄って、そんなに英雄になりたいか？」

「ふ、お前に何がわかる……」

俺の幼なじみ、神崎瞬。

通称、モテ神。

整った顔立ちに目は切れ目。

それを隠すぐらいに伸びた髪の毛から時折見せる鋭い眼光は女子達の大好物だ。

さらには本人にクールな性格&雰囲気も相まってその人気に拍車をかけている。

実に妬ましい。

しかもこいつはそのことに気づいていないでいらっしやる。

実に妬ましい。

まあそのはなしは置いて。

「だって英雄憧れるじゃん英雄マジ英雄いいよな」

「英雄英雄言い過ぎだ」

でもまあ正統派英雄（上条と さんのな？）より裏方で頑張ってる英雄（ ー 通行的な）の方が好きだけど。

俺の性格じゃ熱血よりクールの方が似合うしな。

夜。

あのあと適当に会話をして、家に着いて飯食って風呂入って漫画読んでアニメみてラノベ読んだ俺は”とあること”への準備を始めた。”とあること”。それは……神への祈りだ。

OK、ちゃんと説明しよう。

俺は朝昼晩の一日三回神へ祈りを捧げている。

朝は6時に起きて、昼は学校の昼休みに使われていない用具室で、そして最後は夜にだ。

えっ、祈りの内容は何だつて？

そんなの決まってるじゃないか。

『異世界への転生』だよ。

OK、笑ってもらっても構わない。

だって異世界だよ異世界！！

異世界⇨魔法だし転生⇨チートだし！

まさに男のロマンといっても過言ではない！
だから、俺は今日も、準備を終え自作の祭壇（学校の用具室にも同じものを設けてある）の前に座り、神へ祈りを捧げるのだ！

「てんにおられるわたしたちのちちよわたしがいせかいにいけるようにしてくださいおねがいますわたしはつねひごろてんにおられるあなただけのことをかんがえていますなぜならわたしはいせかいにいきたいからですこのきもちにうそはありませんいつわりもございませんわたしは……………」

一時間後。

「…………ゆえにわたしはほんとうにいせかにいきたいのでありまして『ちよつとストップ』ほんとうのほんとうにいきたいこのきもちを『だからストップ…………』わすれたことはごさ『ストオオオオオッブ…………！』うわあ…………！」

なにになに?!なんだ?!

驚いて声のした方を見る俺。

そこには…………息を切らした知らない男性が。

「えつと…………どちらさま?」

「神」

あっさりいつちゃったよこの人!

俺が意味がわからないといった様子をして呆然としていると

「はい君、ちやちよつと異世界に転生するよ」

なんてことを言ってきた。マジデ？

「当たり前だよ、君の毎日のお祈りのせいで、この世界の神様がノイローゼになっただから……」

はあ……………と、ため息と共に言う神。

「えと、自分でいうのも変ですけど、祈り届いたんですか？」

神に質問する俺。

「普通は届かないはずなんだけどね。君は特別。君の思いが格別に高かったのと、あと……」

そう言って神は俺の後ろを指差す。

「その祭壇が妙に力があるんだよね、凄いことに。」

マジか！？ 上条さん父とイ デックスの真似しただけなんだが！？

「まあ、そういうわけで君の意味がわからないお祈りが一日三回365日届いたこの世界の神様はノイローゼにより仕事が出来なくなつたから、他の世界の神様達は君を希望通りに異世界にとばすことにしました。異論は？」

「ありません！！」

俺は元気良く叫ぶ。

「じゃあさっさと行ってきな。チート能力付けとくから」

神様がそう言っていると、俺は白い光に包まれた。

そうして、俺は異世界へと旅立ったのだ。

もちろんやることは一つ。

英雄になろう!!

第一話 俺という設定を決めよう

異世界のとある森の中。

小鳥がチュンチュンと囀り、朝の日差しが木々の間に差し込み、森
一体を明るく照らすのは夜明けの合図だ。

「チュンチュン、チュンチュンチュン」

訳：良い朝だ、実に清々しいな。

「チュンチュン、チュンチュンチュン。チュンチュンチュン」

訳：やはり、この森は良い。魔物さえいなければだがな。

「チュンチュンチュンチュンチュンチュンチュンチュンチュンチュン」

訳：チュンチュンチュンチュンチュンチュンチュンチュンチュンチュン

今日も小鳥さんは絶好調。

そうして小鳥さんはしばらく森の上を飛んでいると、周囲より少し
明るい場所を見つけた。

「チュンチュン？、チュンチュンチュン……………チュンチュンチュン
！？」

訳：なんだ？、あそこだけ……………なんだあれは！？

その光景に小鳥さんは絶句した。

俺を包んでいた光が収まったので、目を開けると

「な、なんだここは!？」

知らない森の中に立っていた。

向こうの方で俺を見て口を開けている小鳥がいる。

しかしあんな体の色が金色な鳥は、俺の世界では見たことがない。

つまり……

「異世界だよな……」

やった。ついにやった。

俺は……俺は………! !

「異世界に來たぜー!ーいやっふうふうふうおおおおおっしや
あああっ!ー!ー!」

この異世界に出会えた喜びは、

「まさしく愛だ!」

よし落ち着こう俺。ここはクールに行こうぜとか某伊達政宗さんも言ってるじゃないか。

まずは現状確認だ。

異世界に来た、以上。

「くふふふ」

ダメだ、ニヤケ笑いが止まらない!!

そうしてくふふふと笑っていると、

「おっ、無事異世界に来れたようだね」

「神様ッ!」

神様が森の中から歩いて来て、俺に話し掛ける。

「喜んでくれてなによりだよ。それより君はこれからどうするんだい?」

首を傾げながら聞いてくる神様。

「ん〜とりあえずこの世界の事を教えて下さい」

「君が想像している異世界って言えばいいかな？」

つまり魔法（厨二病的な）あり魔物（それは厨二病的な）ありギルド（それはもう厨二病的な）ありですね。

わかりやすい説明ありがとうございます。

「この異世界で俺ってどんな設定なんですか？」

やっぱりこれは気になる。

すると神様は苦笑して、

「まだ決めていないんだ。希望があるなら聞くけど。」

えっとそれってつまり…

「自分の生まれとか容姿とか名前とか自分で決められるんですか？」
「！」

「そついうこと」

俺の質問に頷く神様。

ということは生まれを貴族とかにしてハーレムとか容姿をイケメンにしてパーリナイ（訳：ウハウハ）とかできるってことか！？いや
まで、俺がここに来た理由はなんだ、答える自分！

はっ！ 英雄になるためでございます！

そうだ！ ……でも王道な英雄はあまり好みじゃないからな。

というわけで、

「小さな村で暮らしていたが魔物に襲われて一人だけの生き残りとして生きながらえて親切な老夫婦に育てられているクールでカッコいい少年という設定でお願いします！」

俺は一息に自分が希望する設定を言った。

すると神様はポカーンとした表情をして俺の顔を見た。

「えと、そんな設定で良いの？ もっとこう派手な貴族的な設定ではなくて？」

顔の表情を元に戻し、俺に尋ねてくる神様。

まあ王道の英雄になるためだったらそっちの方が良いだろう。

普通は英雄って言ったらTHE 王様の息子で熱血で良い人だからな。

だがそういう設定だと失敗したあとでフォローを入れにくい。

最初から英雄っぽいやつだと、なんかミスったときに評価を下げて

しまう恐れがある。

それだったらあえて最初（評価0：好感度0）から始めた方がやりやすい。

そして後から自作自演で自分の評価を上げていけば良い。

そのためにさっき言った設定が必要不可欠なのだ。

というわけで

「まあ、設定はさっきので大丈夫です。ちゃちゃっと設定を反映してください！」

「いやまあ………はあ、分かったよ。後悔しないでね？」

そういつて神様は俺に指を向けて

「ビビデバビデブー！！！」

突如として俺の体が光に包まれ、ついで意識が薄れていく。

「じゃあね、この世界を楽しんでね」

神様の言葉を最後に、俺は意識を手放した。

第一話 俺という設定を決めよう(後書き)

この設定が、あとで火を噴きます(予定)

第二話 『設定』という能力(前書き)

ぶっちゃけまだまだプロローグ
そして携帯で文字を打つのは面倒臭い……

第二話 『設定』という能力

目が覚めると、ベッドに横になっていた。

「……………ビビデバビデブーはないだろ……………」

状況についていけない俺は、本来は言うべき「知らない天井だな」という伝説の台詞を言い忘れていることに気づいていない。

体を起こし、ベッドから出た俺は自分のいる場所を確認する。机、ベッド、本棚といった物はあるけれど、その他はなにもなくあるものでさえこの部屋と同じ様に質素なものであった。部屋の北側に付いていた窓から風景を眺めると、村の広場で子供達が遊んでいるのが目に入った。

恐らくここは神様に頼んだ設定『老夫婦』の家なのだろう。

「ていうかいきなり家のベッドからスタートと……………か……………」

……………あれ、俺ってばもしかしてあの伝説の台詞「知らない天井だな」を言い忘れた?!

いまさらながらそのことに気付いた俺。

後の祭。

俺が頭を抱えしゃがみ込んで落ち込んでみると、部屋の外から階段をのぼってくる音がしてきた。

恐らく老夫婦のばあさんかじいさんのどちらかがのぼって来ているのだろう。

「まずいな……」

俺は落ち込むのを止め、内心焦りはじめる。

何がまずいのか、それは大まかな設定は神様に頼んで反映してもらったけど、詳細は決めてない。

つまるところ、老夫婦とどう接すれば良いのか分からないのだ。

神様にはクールな少年とだけ頼んでいたが、具体的にどれだけクールなのかを決めていなかった。例えば考え方がクールで普段は明るい性格なのか、それとも言動や行動も全てクールなのかとか。

もし本当は前者の設定なのに、俺が後者の振る舞いをしたらおかしいだろう。老夫婦ぶったまげること間違い無しだ。

個人的には無口でクールな少年という設定が良いのだが……、神様にそこまできちんと頼んでいない。

というわけで、話し掛けられても対応の仕様がなない。

あれ、これっていきなり（そこまでではないが）ピンチじゃね？
と思っていると、ついに階段をのぼって来ていた足音が部屋の前で止まると、扉をノックする音がした。

そうしてどうしようどうしようとテンパっているときに、それは起こった。

突如として目の前に、『設定』というなんかよくわからないウィンドウが出て来たと思ったら、

”『設定』を打ち込んで下さい”

と書かれた注意が。とりあえず俺は急いで”無口な少年”と打ち込んだ。

ピローーーーン

”了承しました。設定を反映します。”

下手な機械の音と共に人工音声が頭の中に聞こえた、思った次の瞬間には扉からばあさんが入ってきた。

「あら、起きてたのかいカイト」

話し掛けてくるばあさん。

「……………」

テンパって何の返事もしない俺。

ばあさんは(テンパって)何の返事も反応もしない俺を見て、さもいつも通りといった感じで接してくる。

「じゃね下で朝ごはん用意してるから、洗面台で顔洗ってきてね」

ばあさんはそう言って部屋から出て階段を降りていった。

……なるほど。さっきの『設定』というのは俺が望む設定を打ち込む事で、それを反映させるものなのか。把握。

まさにチート能力ですね。

まあ、それは置いていて。

ばあさん、洗面台ってどこ?!

第三話 自作自演劇場の準備

とりあえず階段を降りてすぐの所に洗面台があったので顔を洗い、温か〜い朝ごはんをばあさんと一緒に食べる。が、なかなか食が進まない。

「カイト、体調が悪いんかい？ 大丈夫かい？」

「……………大丈夫」

心配してくれるばあさんに、俺はクール&無口キャラで返事をかえす。

まあこれは設定で決めた事だし、一応英雄になるために必要な事だからな。今のうちに慣れておく必要がある。

……………何、このキャラ設定がなぜ英雄になるのに必要なのだったって？

ふっ（呆れ笑い）

無粋な事を聞くんじゃないよ。男のロマンだ。それにいつかわかるさ。

それよりもだ。体調は悪くない、むしろピンピンしているぐらいだ。

じゃあ何故食が進まないのか。それはだな、さっき洗面台で衝撃的なものを見てしまったからだ。

そう、洗面台の鏡に映った俺の顔。

テ・ラ・イ・ケ・メ・ン!!!!!!!!!!!!!!

テ・ラ・イ・ケ・メ・ン!!!!!!!!!!!!!!

テ・ラ・イ・ケ・メ・ン!!!!!!!!!!!!!!

重要だから三回いったよ!!。

ていうか三回といわず四回五回、いや百回ぐらい言いたい！ けどそんなことしたら誰かに嫌われそうだからしないけどね！主に読者に！

いやそれにしてもホントにマジでイケメンなんですよ。

水嶋　口とか敵じゃないレベルですよこれ。

それはそれはもうとても整った顔立ちにクールな雰囲気醸し出している目。さらにはこの白い肌に黒い髪がよく映えること映えること。

体の方は元々の高校一年生の体つきから、今は10歳ぐらいのものになっていて、若干ひ弱に見える。が、服の下には程よい筋肉が隠されている（要するに着痩せするタイプ）。

全体的に見て100点満点です。自分の姿見て心臓バクバクで食事どころじゃないわ。ほんと神様は良い仕事してくれたよ。

感謝感謝。

そんなこんなで食が進まなかった俺はばあさんから心配され続け、「無理をするな」と休みを貰ったのでただ今絶賛村内散策中である。家を出るときに、ばあさんから「東の森には行っちゃ行けないよ。魔物が出るからね」みたいなことを言われたので、後で行くことにして、

「さすが異世界、髪の色はバリエーション豊かだなあ」

俺は周りを見て呟く。

さっき部屋の窓から見たときも思ったが、よくよく間近で見るとその色の多さに驚く。

青や赤、緑や黄といった色はともかく、あの人なんてシマウマだぜ？ しかもその向こうの人は右半分は赤、もう左半分は青色だよ？ なんて仲良く間をとって紫色にならなかったのか不思議でたまらない。

そうやってしばらくの間髪の色を観察しながら歩いていると、皆から送られてくる奇異の視線に気付いた。

俺を見ながらひそひそ話もしていて気になるが、生憎その内容までは聞き取れない。

「……………あつ」

そつだ、さっきのチート能力『設定』を使えば何とかなるんじゃ……？

俺はすぐに出ろ〜出ろ〜と念じて『設定』のウィンドウを出す。

”『設定』を打ち込んで下さい”

出て来たウィンドウには先程打ち込んだ”無口な少年”とだけ書かれている。

あとはここに何かしら『設定』を打ち込んで書けば良いのだろうが、下手なことは出来ない。

なぜか？ 先程のばあさんのが良い例だ。

あの時俺はとつさに”無口な少年”と書いたが、それが反映され、ばあさんは俺のことを”無口な少年”として認識した。周りの村人達もきつと俺のことをそう認識しているのだろう。

つまりこのチート能力、扱いが難しい。

いまここで俺が『設定』に”魔法が使える”と書いたら、多分周り

は俺のことを”魔法が使える””無口な少年”として認識するだろう。

多分俺のことを知っている人達の記憶に干渉してそうさせているに違いない。

だから今周りの人達のひそひそ話を聞きたいがために、『設定』に”耳が良い”とか書いたら、それが反映。彼等は俺のことを”耳が良い””無口な少年”として認識する。そうならばひそひそ話を止めてしまつだろう。

全員の記憶に干渉せず、自分だけに”耳が良い”という『設定』を反映させる方法、これを見つけないとはいけない。

……………う〜〜ん〜〜（考え中）……………

…………………………！（発見）……………

これでいけるか……………？

俺は『設定』に恐る恐る某ゲームモンスターハターの真似をして、”スキル「聴力アップ」”と書いてみた。

”了承しました。『設定』を反映します”

すると周りの音が良く聞こえるようになり、人々の声も明瞭になっ

て耳に入ってきた。向こうで話している奥様方のひそひそ話も止める様子はない。

それを見て、何とか自分だけに『設定』を反映できたようだと安心する俺。

……ていうか、あんな”スキル”で解決できるならさっきまでの長い文章は必要なくね？

後の祭

まあそんな後悔は置いといて

俺はクリアになった聴覚で、奥様方がしているひそひそ話に耳を傾ける。

奥様A「ほらあの子、この前魔物に壊滅させられた村の唯一の生き残りらしいわよ」

奥様B「なんであんなひ弱そうな子が生き残ったのかしら」

奥様C「きつと魔物に魂を売ったのよ！だからあんな無口なんだわ！」

奥様D「とんだ疫病神ですわですわ。この村にも何か災厄が起こるかもしれないですわですわ。あのバーム夫妻もよくあんな子を引き

取ったですわですわ」

……なるほどな、そういう目で見られているのか俺は。

だから大人や子供達までもが、俺を避けたり奇異な目で見たりしていたわけか。

……俺の容姿がイケメンだから見ていたわけでないのか……グスン。
というか、あの老夫婦。名前バームって言うのか。知らなかった。

次々に飛び込んでくる悪口で俺に対する印象を確認していると、次は向こうの飲み屋の前で体格の良い農民の話し声が聞こえてきた。

農民A「最近東の森の魔物が活発化してきているらしいな」

農民B「ああ。おかげで畑に魔物が入って来て仕事になんねえ」

農民C「こりゃ村長に頼んですぐギルド（！）に魔物討伐の依頼を出してもらおうか」

そうだな、とうなづいて農民達は去っていく。

（やはりギルドがあるのか！万歳！）

内心喜び（だってギルドだよ、『二つ名』とかつけてもらいたいな

！)ながら、俺はあることを思い付いていた。

いくら設定上親切な老夫婦（名前はバーム）だとしても、村人の悪口から鑑みるに俺の印象は最悪。いずれ村人達（主に奥様）が、俺のことが原因で老夫婦に手を出さないと限らない。そうしたら最後、『親切な老夫婦』いえど、俺を追い出すかもしれないし、なにより老夫婦に害が及ぶ。そんなことはさせたくない。

だったら、その前に村を出てしまえばいい。

はい、ここまで理屈を述べていましたが、要するに俺が村を出たいだけです。

だって英雄になるための設定上、このちんけな村からスタートする必要があつたつてだけでたいして思い入れもないし、そもそも長居する必要もないし！

それに幸にもあの農民達がギルドに依頼を出して人を呼んでくれるらしい。

ならばやることひとつ。あれしかない。

自作自演による自己アピール！！

数日後に来るであろうギルドの優し〜い人が俺カイトという特異な存在を見つけ、さらに俺の境遇を憐れみ、ギルドにお持ち帰りす

るというテンプレストーリー！

これを自作自演で演出する！ 名付けて『憐れな少年救出物語（ギルドサイド）』！！

勿論、脚本家・監督は俺だ（笑

なに、俺にはチート能力『設定』がある。脚本家兼監督として俺ほど有能な人物はいないだろう。

俺は脚本家兼監督として、物語の演出を万全なものとするためと、『設定』の能力を確認するために、魔物が活発化している東の森に向かった。

そしてその日の夜、『憐れな少年救出物語（ギルドサイド）』の成功の確信を得た俺は、ギルドの人が来る三日後（さつき村人が話しているのを盗み聞きした）までに、自作自演の舞台作りに励むのであった。

第三話 自作自演劇場の準備 (後書き)

次回から、自作自演劇場『憐れな少年救出物語(ギルドサイド)』が
はじまります。

主人公カイト視点ではありません。ギルドの青年視点で物語が進み
ます。

第四話 自作自演劇場『憐れな少年救出短編物語（ギルドサイド）』（前編）（前

この劇場は、脚本家 カイト と 監督 カイト の二人のスポンサーのご提供でおおくりします。

第四話 自作自演劇場『憐れな少年救出短編物語（ギルドサイド）』（前編）

走る。

走る。走る。

走って、走って、走る。

「はあっはあっはあっ……」

半月の夜。

月の光があまり届かない森の中を走り続ける。

「はあっはあつくそッ！ はあっはあッ……」

今、夜の森の中を満たす音は、風の音、風で揺れる木々の音、青年が全速力で走る音。

そして、その青年を、二十頭以上の魔物が追いかける音。

「はあっはあっ、な……んでッ」

息も絶え絶えになりながらも青年、トール・アイトスは走り続ける。

彼はフランクの魔物の討伐依頼を受けて、近くの村からこの森に来ていた。

そのはずだった。しかし、

(なんでDランクの魔物なんだ!?)

彼の後を追いかけている魔物はフランクなんかではなく、まさしくDランク。

彼、トール・アイトスでは手も足も出ない。

「はあっはあっ……あッ!?!」

夜の森では辺り一帯が暗く、視界が悪いため、地中から這い出ている木の根に気付かず、トールは足を引っ掛けて転んでしまった。

「はは……こ、こりやまずったな……」

後ろを見ると、そこには数多くの魔物が迫ってきていた。

トールは、何故このような状況に陥ったのか、記憶を振り返った……

地方都市”パース”からある小さな村を結ぶ林道に、剣を腰にさして並んで歩く二つの人影があった。

一人ははたから見てもはしゃいでいるのが分かる快活な青年。

もう一人は顔から判断するに50歳半ばといった辺りだが、その姿は凜としていて覇気を感じさせる、まさにいぶし銀の艾年男性。

青年の名はトール・アイトス。

最近ギルドランクEになったばかりの新米ハンターだ。

対してその隣を歩く男性の名はテラ・トウエイン。

トールの師匠とも呼ぶべき存在で、ギルドランクはS。二つ名『不可視の剣豪』を擁するギルド屈指のハンターだ。

そんな二人はただ今、ギルドの依頼を受けて魔物が出るという村へと向かっている途中である。

「師匠。今回は依頼にご一緒させていただき、ありがとうございます！す！」

「今回はさして難しい依頼ではないからな。お前と一緒に連れていっても良いと判断したまでだ。」

トールの浮かれた声に、師匠ことテラは厳格な声で答える。

「それでも、今までどんなに難易度が低いランクでも、一緒に連れていってくれなかったじゃないですか」

「それは単にお前が弱かったからだ」

つまり今は弱くない、と言ってくれているのだとトールはテラの言葉聞いて思った。

昔から、テラがトールを弟子にしたときから、テラは一回も「お前にはまだ早い」と言っ、トールをギルドの依頼に連れていくことはしなかった。

故にトールは、今回自分を連れていくのは自分のことを師匠が認めてくれた、強くなったと認めてくれたのだと思い、喜んでいた。

(今回の依頼で師匠に良いところを見せられれば……………！)

トールはそう意気込みながら、村へと向かうのであった。

地方都市から長い道のりを歩いて、ようやく村に着いたときには、もう夕方であった。

「私は依頼の詳細を依頼主の村長の元に伺いに行くから、お前はその辺をぶらぶらしている」

どうせ待っていると書いても待たないからなお前は、と言葉を付け足したテラはトールを置いて村長宅に向かった。

トールは元来堪え性のない男だ。

だから、テラが「お前はここで待っている」と書いてもすぐにぶらぶらどこかへ行ってしまふ。

そのことが、テラがトールを連れて行かない理由のひとつなのだが、彼が知る由もない。

トールはぶらぶらしているとされたので、村の広場に来ていた。

広場の中心にはとても大きな木があり、その周りでは子供達が思い

思いに遊んでいた。が、夕方だからなのだろうか、一人また一人と遊ぶのを止め、それぞれ家へと帰って行った。

「いやゝしかし、村は小さいのにこの木は似合わず大きいなゝ」

トールは若干失礼なことを言いながら、木を見上げた。

近寄れば近寄るほど、その大きさに圧倒される。

そうしてスゲーと思って木に近寄っていくと、トールは木の下に佇んでいる黒髪の少年に気が付いた。

(うわ、かっこいいなあの子。それにしても、何をしているんだろ
う?)

黒髪の少年は、ただ単に立っているだけだが、どこか空を見つめ物思いに耽っている様にも見える。

トールはそうしてじっと立っている少年を見ると、少年もこちらに気付いて見返してきたので、近づいて話し掛けることにした。

「やあ、こんなところで何してるんだ？」

「.....」

だが少年は何も言わない。

トールの顔を見るだけで、なんの反応も示さない。

「遊んでるの？」

「……………」

「もう夕方だよ、帰らなくて良いの？」

「……………」

トールが話し掛けるも、無反応な少年。

(無口な子だな……………)

トールは、次はなんて言葉をかけようか悩んでいると、少年の目が自分の顔から腰に差している剣の方に向いたことに気が付いた。

「あ、この剣？ オレって実はこれでも一応ハンターの端くれだね。ギルドの依頼で師匠と一緒に魔物退治するためにこの村に来たんだ」

「……………魔物？」

お、食いついてきた。

トールは少年の興味を引くために、さらに言葉をかける。

「そう、魔物。でもまああんまり強くないらしいからね。依頼のランクもFだったし。討伐依頼の魔物もFランクの、…たしか”ローウルフ”？ だっけな。まあ弱い魔物だからね」

余裕で倒せるよ、とトールは言葉を付け足した。

「……………」

「それにオレの師匠は凄く……………あれ？」

トールは饒舌に話していたが、話しの途中で少年が走り去って行ってしまったので驚いた。

「…なんか気に障ることも言っただかなオレ？」

自分の言動を振り返って見るが、そんなものは見当たらない。

トールは首を傾げた。

「おーいトール！」

自分の名前が呼ぶ声がした方を見るトール。当然、そこにはテラがいた。

「師匠ッ！！」

トールは子供の様にテラの下に駆け寄る。

「何をしていたんだ、あんなところで？」

テラは訝しげに言う

「いや、なんもしてないです。ただぶらぶらしてました」

「そうか。村長から大体の依頼の内容は聞いた。東の森の近くにある畑に魔物が頻繁に出るらしい。今日はもう遅いから村長が用意してくれた宿にいつて休んで、明日その畑に向かうぞ」

「了解しました！」

宿に向かって歩いていくテラの後に付いて行きながら、トールはさっきの少年のことを思っていた。

(不思議な雰囲気少年だったな。それにと………)

話しの途中で走り去っていったときの少年の表情。

その表情はどこか………

悲しそう、だったな。

第四話 自作自演劇場『憐れな少年救出短編物語（ギルドサイド）（前編）（後

この劇場は、脚本家 カイト と 監督 カイト の二人のスポンサーのご提供でおおくりしました。

今回は 自作自演劇場『憐れな少年救出短編物語（ギルドサイド）』（中編）をおおくりします。

第五話 自作自演劇場『憐れな少年救出短編物語（ギルドサイド）（中編）（前

更新遅くなって本当にごめんなさい！

あとこれから合宿いくんで更新が……

合間合間に更新するよう頑張ります！

第五話 自作自演劇場『憐れな少年救出短編物語（ギルドサイド）』（中編）

夜、宿で夕食を食べて、師匠とともに明日のことについて話していると、初老の男がやってきた。

「こんばんわ。何かご不便はございますかな？」

初老の男は微笑みながら言う。

「今のところは無いから大丈夫だ。」

テラが返す。

すると今度はトールの方を向き、

「こちらの方が『不可視の剣豪』のお弟子さんですか。私はこの村の村長をしています、マス・ハムレットです。」

「トール・アイトスです。よろしくです。」

村長が自己紹介をしたので、トールもそれに返す。

「『不可視の剣豪』のお弟子さんとなられる方なのですから、さぞお強いのでしょう。期待していますよ。」

「いや〜それほどでも。」

「村長。こいつはまだEランクなりたての馬鹿弟子だぞ。」

「そんなのですか？ …… お帰りいただいて結構です。」

「扱いひどくないですか!？」

冗談ですと言う村長にびっくりしたじゃないですかと焦るトール。

その様子を見て、テラは微笑んだ。

テラと村長のハムレットが世間話に花を咲かせているときに、トールは夕方に出会った黒髪の無口な少年のことが気になったので、村長に聞いてみることにした。

「すみません、ちょっといいですか。」

テラとの世間話をやめ、トールの方を向く村長。

「何でしょうか、トールさん？」

「あの、黒髪の少年のことを聞きたいんですけど……」

「……黒髪の？」

「はい、なんか不思議な雰囲気で、無口な少年なので気になったんですけど……」

トールが言葉を続けていると、村長が顔を曇らせる。

それを見たテラが村長に尋ねる。

「なにかわけありなのか？」

「……はい。ツールさん、その子はおそらくカイトのことだと思います。」

カイト、それがあの子の名前なのか。今度ちゃんと名前と呼ばうとツールは思った。

村長は続ける。

「最近、ここから近くの村が魔物によって壊滅させられたのはご存じですか？」

「そうなんですか?!」

「常識だ馬鹿弟子」

ツールの頭を、テラは思いっきりたたく。

「たしか村を壊滅させたの魔物はAランクの”デバース”だったな。」

テラの言葉にツールは驚く。

「Aランクの魔物が何でこんなところに!？」

ツールが驚くのも無理はない。

一般に魔物はGランクから順にF、E、D、C、B、A、Sまで強さによって分類されている（ちなみにGランクは農民でもぎりぎり倒せる）。AランクやSランクはいることにはいるが、その個体数はきわめて少ない。

言い方は悪いが、こんな場所なんかに出てくるわけがないのだ。

しかし、

「近くの村にそんな魔物が出たんじゃ、この村も危ないんじゃない……」

トールはふと思った疑問を率直にぶつける。村長は頷く。

「実際、とても危険でしたよ。」

「でした……？」

トールはその言葉に引っかけかりを覚えた。

トールは村長の次の言葉を待っていると、

「トール、一応村の見回りに行ってきたりしてくれないか？ 魔物がいるかもしれないしな」

「師匠？」

テラが口を挟んできたので、トールはほほを膨らませ不満を表す。

「そうですね。魔物が出たら危ないですからね。トールさん、こちらからもお願いします。」

テラに続き、村長も頭を下げてお願いをする。

「え〜……。分かりましたよ。見回りに行ってきます。」

渋々と言った感じで了承するトール。

「早く行け馬鹿弟子。」

「なんならそのまま帰ってこなくても結構ですよ?」

「だから扱いがひどすぎる!」

涙目でトールは宿を飛び出して、見回りに行ったのだった。

.....

「.....で、どういふことだハムレット。一応希望通りに追い出したが」

ハムレットの空気を察知し、トールを追い出したテラ。

「ありがとう、テラ。なに、少し込み入った話しになるから、二人きりで話したいと思っただけさ」

突然口調が変わって驚いたと思うが、テラと村長ことハムレットは

昔からの旧知の中なのだ。

故にこんな辺鄙な村の依頼を、Sランクであるテラが受けている。

(まあ、あと二つほど理由があるがな)

テラは内心思う。

「いやしかし驚いたね。弟子はとらないと言っていた君がねえ。ど
ういう風のふきまわしだい？」

「あいつには才能がある。ただそれだけだ」

「やっぱり君と同じで魔法は使えないのかな？」

「そうだ……。おい、ハムレット。話しを戻せ、何故二人きりで話
しがしたい？」

雑談を切り上げ本題に入ろうとするテラ。

ハムレットはまあまあとあって、

「……Eランクの若造なんかに、話していい内容なんかじゃないか
らね」

声音を変え、雰囲気を一変させて言うハムレット。

さすが腐っても、ハンターから引退していてもAランクだな、とテ
ラは思った。

二つ目の理由がこれだ。正直、この依頼があること自体がおかしいのだ。Fランクの魔物討伐なんて、引退してると言ってもAランクのハムレットなら朝飯前なのだ。それなのにわざわざギルドに依頼をする。この不自然さに、眉をひそめたテラは依頼を受けた。

そして最後の三つ目の理由であり、テラの最大の疑問。それは、

この村が、存在していることだ。

「Aランクの魔物”デバース”によって近くの村が壊滅したのだ。そのときにこの村も標的になって壊滅したとしてもなんら不思議ではないのだ。」

「……なにがあった？」

「尋ねるテラ。」

「さっきの話しを覚えているかい？」

「近くの村に魔物が出たことか？」

「それもある。だけどそれよりも前の話だ。」

「少し考えるテラ。」

「……トールの言っていた少年の話しか？」

「そうだと頷くハムレット。」

「それがどうかしたのか？」

「『実際、とても大変でしたよ』」

唐突にさっきの話の続きをするハムレット。テラは黙ってそれを聞く。

「村を壊滅させて雄叫びをあげるAランクの魔物”デバース”。その巨体さ故に、この村からでもその村を蹂躪し破壊していく様をこの目で見る事が出来たよ。」

さらに言葉を続けるハムレット。

「村を破壊し尽くしたデバースは向きを変え、この村の方に迫ってきた。」

あの時は流石にまずいと思ったなとハムレット。

「そして村の前まで来てあわやと思われた。そのときだったよ、ありえないことが起こったのは」

「ありえないこと？……………なにが起きたんだ？」

「驚くなよ？」

そこで一旦言葉を止め、息継ぎをするハムレット。

テラはハムレットの次の言葉を緊張した面持ちで待つ。

「……何もしなかったんだ」

「は？」

意味が分からないと言った様で驚くテラ。

それを見て苦笑するハムレット。

「あの獰猛で破壊を愉しみ、格上であるSランクの魔物にさえ闘いを吹っ掛ける、あの”デバース”が、この村の前を素通りして、まるで”何かに怯えている”かのように、何もしないで”逃げ”ていったんだよ」

「……」

テラは開いた口が塞がらなかった。

獰猛残忍で村など人里を襲った後は何も残さないことで有名な”
が何もしないで逃げる。しかも怯えてだと……？

「ありえない……」

「だろ？」

テラの言葉に、ほらなといった感じで返すハムレット。

「だから、一応そのあとすぐに村に行ったんだ。手がかりが見付か
ると思つてね。…そして見付けたんだ。いるはずのない生存者をね」

「……まさか」

「そう、それがカイト。さっきツール君が言っていた少年だよ」

さらにハムレットは言う。

「ギルドにフランク魔物討伐依頼を出せば不審に思った君が来てくれると信じていたよ。君が来て、この話しをするのが僕の狙いだっだからね」

やはりなとテラ。

「そしてもう一つ、話さなければならぬ驚くべきことが出来ただ。だ。」

「…まだあるのか」

さっきの”デバース”話しに加えているはずのない生存者カイト。これ以上驚くことがまだあるのか。

「先日、君がまだこの村に向かってきている途中であろう時のことだ。唯一の生き残りであるカイトの様子を見にカイトを引き取ってくれたバーム夫妻の家に行ったんだ。」

さらに言葉を続けるハムレット。

「夫妻からカイトは裏庭にいと聞いた僕は見に行っただ。」

そこで一旦言葉を止め、

「……そしたら、カイトが魔法を使っていたんだ」

「…………それがどうした？」

ハムレットのなんでもない内容の話しに疑問を感じるテラ。魔法を使えることは珍しくない。むしろ使えない人の方が少ないくらいだ。

訝しげな目を向けてくるテラに、ハムレットは首を横にふる。

「確かに魔法を使えることは珍しくない。……………だけど、使える魔法の属性が問題なんだ」

「……………！まさか！」

「そのまさかだよ。カイトはつかえるんだよ。あの

”絶対属性”をね」

第五話 自作自演劇場『憐れな少年救出短編物語（ギルドサイド）』（中編）（後

来ました”絶対属性”かつこいいー！！

これから厨二病を増やしていきたい！

あと感想を入れてくださっている方、本当にありがとうございます！

ちゃんと返信したいと思います！（合宿中に時間があれば………厳しいかな？）

皆よ、私は帰ってきた！

…………… すいません更新しないで（――）

だって合宿で風邪引いてダウンして帰ってからもいろいろあったんだもん。

それに携帯で打つの面倒だし

まあそれは置いといて

ついに後編です。

というわけで一言いいですか？

こんなに長くなる予定無かったああああ！！

第六話 自作自演劇場『憐れな少年救出短編物語（ギルドサイド）』（後編）

テラと村長に追い出されたトールは、言われた通りちゃんと村の見回りをしていた。

「とうかなんかあれだな、確実になんか隠してるな」

話しを途中でわざと切られたトールはテラと村長の二人が何かを隠していることに感じていた。

（師匠と村長のハムレットさん、なんか仲良かったし。知り合いなのかな？）

うーんと悩むトール。

（それにカイトと村が壊滅した話しはなんか繋がりがあるのかな？
途中で追い出されたから分からないな……… まあいいや）

頭が弱いので考えるのを止めたトールは見回りの最後の場所として夕方に来た広場に着いた。広場の中心にそびえる大木は、夕方時と印象を変え、今はとても重く全てを拒否するかのような印象を抱かせる。

そして、そんな印象と同化して大木の下に立って星空を見上げている少年をトールは見つけた。

（もしかして…）

トールは小走り少年に近寄る。その少年がやはりカイトだとわか

るとトールは話しかけた。

「やあ、また会ったね。カイト」

「……なんで？」

何故自分が名前を知っているのか驚いている（顔には出ていないが）様子でこちらを見てくるカイトに、トールは理由を言う。

「村長さんに聞いたんだ、君の名前」

「……そう」

カイトはトールから目を離し、地面に座って再び空を見上げる。

その様子を見て

「カイトは空が好きなの？」

同じように座りながら言うトール。

「……何で？」

「いや、ずっとそうやって空を見ているから好きなのかなと」

夕方にあつたときもそうしていたよねとトール。

「……………別に好きじゃない」

そこでカイトは間を開け、

「……………空に、お母さんとお父さんがいるから」

「……………え？」

固まるトール。

「……………死んじゃった。お母さんとお父さん。魔物に殺されて、生き残ったのは……………僕だけ」

そうしてカイトは襲われた時のことを思い出しているのか、孤独を感じさせる悲しい表情をした。

そうか。だからカイトの話をした後に、村が壊滅した話を村長さんはしたのか。

そして何故夕方の時の去っていく表情が悲しそうだったのか、その理由をトールは知りカイトのことをかわいそうに思った。

何とかしてあげたいと思った。

それは、カイトとトール自身の境遇が似ているからなのか。

昔。昔といつても二、三年前の話だが、トールも魔法を使えないが故に孤独だった。『落ちこぼれ』のレットルを貼られ、みんなに蔑まれる日々。

もしあのときテラがトールの剣の才能を見出し、弟子にとつていなかったら、トールはおそらく壊れていただろう。

カイトにもそんな自分と重なる部分があると、トールは思った。

だから、カイトを助けない。しかし自分は『不可視の剣豪』のテラの弟子とは言ってもEランク成り立てのハンターでテラのように強くもなければ魔法も使えない。

そんな自分がカイトを孤独という悲しみから助けることなど出来るわけがない。

「……………ねえ」

「え、あ、な何？」

自責の念の海に溺れていたトールはカイトの声によって現実に意識を掬い上げられ、考えて下げていた頭を上げた。

「……………名前、何？」

そうか、まだ名前を言ってなかったなとトール。

「オレの名前はトール・アイトス。『不可視の剣豪』テラ・トウエインの弟子でギルドランクはE。よろしくね、カイト」

「……………トール、トール、トール……………」

覚えてくれようとしているのか、自分の名前を一生懸命反芻してくれるカイトを見て、トールは嬉しく思った。

（そうだ。強くなかったっていい。カイトを、カイトの心を支えられれば良いんだ）

名前を教えた後、ツールとカイトは何もしゃべらずに、しかしそこに余所余所しい空気はなくまるで兄弟のように並んで大木の下に座っていた。

「そろそろ戻るかな。宿で師匠も待っているだろうしね」

そういつて立ち上がるツール。

「……………うん」

心無しか柔らかくなった口調で返事をして、カイトも立ち上がる。

「あれ、そういえばカイトはどこで暮らしているの？」

「……………バームさん家にいる」

「……………そっか。バームさんは優しい？」

「……………うん。良く、してくれる」

ちゃんと返事をしてくれるカイトを見て、無口なのは感情表現が苦手なだけなのかとツールは思った。

「じゃあね、カイト。また明日」

そういつてカイトから離れ、宿に戻るうとするトール。

そのときだった。

風が吹く。

大木の葉が揺れる。

「トール」

.....ゾク

「!..!」

思わず悪寒が走る声で自分の名前を呼ばれたトールは声のする方、後ろを振り向く。

もちろんそこにはカイトがいた。

しかし、まどつている雰囲気は先ほどとはまるで違う。今のカイトのそれは、子供が持つものとはあまりにかけ離れていて、異質な物であった。

「トール」

そしてもう一つ、決定的な違いがあった。

さっきまでのカイトの黒い眼。

それが、赤く輝く眼に変わっているのだ。

「トール」

カイトの三度目の呼びかけに、カイトの今までと全く違う雰囲気、口調にとまどいを覚えながらトールは答える。

「……なんだい、カイト」

一瞬の静寂。そして、

「それは本当にフランクか？」

「え？」

なんのことか分からないツールに、カイトはもう一度言った。

「依頼の魔物は、本当にフランクか？」

早朝、まだ村の人々が活動を始める前の時間、魔物が出るといっ畑にテラとツールは来ていた。

「やはり足跡が残っているな。しかも森まで足跡が続いている。これをたどれば魔物の所に行けるかもしれん。」

「……」

「この時間帯は一番魔物の動きが鈍くなる。運が良ければ不意をつけることができる。」

「……」

「今の内に……っておいツール聞いているのか？」

「……え、あ、はい。な、何でしょうか？」

「聞いているのかと言っているんだ馬鹿弟子。お前の為に魔物の追跡法を教えているんだぞ。」

「すみません師匠。聞いてませんでした……」

トールの言葉にため息はつくテラ。

「もう一度言っから今度はちゃんと聞けよ？」

「……はい」

「ここに足跡が残……」

最初からきちんと説明しているテラだが、正直トールの耳には一つも入っていないかった。

何故かというと昨日の出来事が頭から離れないからだ。

（昨日のカイトの言動……）

『本当にフランクか？』

（あれは、何だったんだろう……？）

その後、謎の言動の直後だがカイトはツールに背を向けて走り去り

消えてしまった。

「カイト……君はいつたい……何者なんだ？」

「話を聞け馬鹿弟子!!」

「痛っ!!」

「おかしい」

森での魔物搜索を打ち切り空が暗くなり始めた頃村に戻って酒場に行き休憩しているときにテラが言った。

酒場のテーブル席に座り、テラの手には先程注文した茶（みたいな物）、トールの手にはソーダ（みたいな物）が入ったグラスが握られている。

「何がですか？」

ソーダを一口飲み、トールが言う。

「お前は気がつかなかったのか？」

茶をすすりながらテラ。

トールはしばらくソーダを飲みながら、思い当たることを言った。

「もしかして、魔物の足跡の事ですか？」

「それだ」

頷くテラ。

確かに、今考えるとあれは変だったとトールは思った。早朝森での搜索時に、畑から辿っていた足跡が森の中で消えていたのだ。他に見つけた足跡を辿っていつてもしばらくすると消えていた。

しょうがなく魔物が好む肉を置いておびき寄せても魔物は出てこなかった。

あるときトールは簡単には魔物は出てこないんだなぐらいにしか思わなかったが、

「普通Fランク程度の魔物ならば知能は無いに等しい。今回の討伐対象の”ローウルフ”も足跡を消すという行動はしないはずだ。消したとしてもこの私が追えなくなるわけがない」

テラの言葉にトールは頷いた。

テラはさらに、

「それに餌として置いておいた肉にもすぐにおびき寄せられてくるはずだ。」

「じゃあなんで魔物は出てこなかったんですか？」

「……分かん」

首を横にふるテラ。そこでいったん茶をすすり、しばし考えてテラは言った。

「もしかしたら、フランクじゃないのかもしれない」

「ぶっ!!」

「……何をするんだ」

「すすすすいません!!」

飲んでいたソーダを盛大に吹き出しテラにかけてしまうトール。すぐに謝り服にかかってしまったソーダを拭き取りながら理由を述べる。

「すみません。……師匠がカイトと同じ事を言うんでつい驚いてしまっ」

「……カイトか。あの少年がなにか言っていたのか」

眉をびくりと動かしテラ。

「はい。ええと……確か『本当にフランクか?』と……。あ、噂をすればあそこに」

ほらといってツールが指さした方には酒場のドアが開きっぱなしの出入り口の向こうに見えるおなじみの大木の下にカイトが座っていた。

もうほとんど夜になりつつある村を松明の灯が辺りを照らしている。その灯りは大木の下まで照らし、カイトの表情まで照らしていたがその表情はやはりまだ悲しそうであった。

テラは少し考えた後立ち上がり言う。

「カイトと話をする」

「師匠?」

不思議そうにテラを見つめるツール。

「何故そんなことをいったのか興味がある。お前もついてこい」

テラの言葉にツールも立ち上がり二人とも酒場を出て大木の下のカイトの所に向かった。

……そして舞台は整った。

「カイト~~~~」

「!.....ツール!」

トールの呼びかけにさっきまでしていた悲しい表情を吹き飛ばし嬉しそうな表情をするカイト。

「カイト、紹介するよ。テラ・トウエイン。オレの師匠だ」

「テラ・トウエインだ。よろしくなカイト」

そついつてテラは握手の意の手を差し出すが

「.....」

差し出されたテラの手を握らないカイト。

(師匠のことを怖がってるのかな?)

「カイト、師匠は良い人だから怖がらなくて大丈夫だよ」

怖がっているカイトに言うツール。

「.....よろしく」

ツールを信用し握手をするカイト。

「.....懐かれているんだなツール」

「いや〜それほどでも」

「ふん！」

照れているトールを叩くテラ。

「叩くことはないじゃないですか……」

「さてカイト。君と話したいことがある」

不満を言うトールを無視し本題に入るテラ。

「カイトは昨日トール魔物がフランクか問うたな。それは何故だ」

まるで攻めるような口調で言うテラ。それにトールは待ったをかける。

「し師匠！ もっと口調を良くしてください！ だから子供に嫌われるんですよ！」

「お前は一言多いし黙っている。私は今カイトとしゃべっているんだ。……カイト、何故そう思ったんだ。答えろ」

口調をさらに厳しくして問うテラ。

しばしの沈黙の後、

「……感じたんだ、急に」

「……感じた、だと……?」

カイトの発言の意味が分からないという表情のテラ。

さらに詳しく質問しようとする。

その時だった。

「魔物だ！魔物が出たぞ！！」

村人の焦った声が村に響き渡る。その声に家の外にいた村人たちは混乱し始める。

すぐに叫んだ村人の元に行って話しかけるテラ。

「魔物はどこに出た？」

「ひ、東の森の近くの畑に！ い、一匹じゃねえ。何十匹もだ！」

「きゃあ、魔物よ！ 村に入り込んできたわ！」

振り向くテラ。女の声のする方向には村に入り込んできた一匹の口ーウルフが辺りを走り回っていた。

「師匠！あいつはオレがやります！」

そういつてローウルフに剣を持って飛びかかるツール。ツールは剣

を振り落としたが魔物はそれをひらりと避けて、逃げて行ってしまった。

「くそ！逃がすか魔物め！」

「馬鹿！そつちには行くな！」

テラは止めるが、しかし時すでに遅くトールは魔物が逃げていった方向……夜の東の森に走り去っていつてしまった。

追いかけてよとするも先程の一匹入り込んだローウルフの後を追ってか、ぞくぞくとローウルフが村に入り込み広場にも来ていた。

そしてカイトもないことにテラは気付いた。姿をさがすとトールが走っていったあとを追いかけていくカイトを見付けた。

「くそ！あの馬鹿ガキどもめ！」

愚痴るテラの後ろからローウルフが襲いかかる。

「あぶない！」

村人が悲鳴をあげる。しかし、

「グヤン！」

気づいたときには、テラが剣を抜いていて手に持っている状態。魔物はというと真っ二つになっていた。

「え？」

何が起こったのか分からない村人たち。

「『不可視の剣豪』。その剣を振る速度は人の限界を超え目には見えることは無く、魔物たちは知らぬ間に真つ二つ……てことですよ」
解説をしながら村人たちとテラの元に歩いてくる村長。

「村長!!」

「あなた達は家に戻って、ここは危険です」

村長の言葉に、家に戻っていく村人達。

「……ハムレット」

「どうしたんですかテラ？」

さっき魔物を斬ってから動かないテラを不思議そうにみるハムレット。

「依頼の魔物はフランク……それは間違いだ」

しかし剣を握るその手は震えていた。

「……どういう事ですか？」

表情を強ばらせ問うハムレット。

「こいつはフランクローウルフなんかじゃない……」

こいつは、Dランク”メタモアフォーズ”だ」

「メタモアフォーズ?!なんでそんな魔物が?!」

予想外の魔物に驚くハムレットに、焦った表情でテラが言う。

「ツールとカイトが危ない!」

魔物が逃げた先は東の森の入り口だった。

魔物はいったんそこで逃げるのやめ、ツールの方に向かって方向転換しその牙を向けてきた。

「くらうかよ!」

身を翻し攻撃をよけるツール。そのままから空きになった魔物の腹へ剣を突き立てる……

ガキンッ!!

「え？」

「ガウ！」

「うわっ！」

よけられた後すぐにまた攻撃してきたローウルフの攻撃をよけるトール。だが、

「剣が……はじかれた？」

「メタモアフォーズ」……他の魔物の姿形を取りこみ、その魔物の数倍の力をもって変態をする変異性魔物。……なんでそんな魔物が？」

「わからん……そもそもこんな場所には存在しない魔物だ。……しかし、斬った時の感触、間違いない」

テラは二度メタモアフォーズに取り込まれた魔物に出会ったことがある。その両方とも、魔物の体皮が異常なまでに堅かった。

今回もそれと同様だった。

「おそらく今のトールでは絶対に勝てない。斬ることすら出来ないだろうからな」

声音こそ落ち着いているが、テラの表情は焦っていた。

「早くトール君とカイトを助けに行つてあげたら？メタモアフォーズって言つても所詮はDランク。ここは僕に任せて」

広場にいるローウルフの姿をしたメタモアフォーズの群れを見ながら言うハムレットは剣を構える。

「頼んだぞハムレ……」

ここは任せた、と去ろうしたときだった。

「ズドン！」

「！！！」

大地を押し潰すかのような轟音にテラは足を止め、ハムレットは音のする方を向く。

「ズドン！！」

「訂正するよテラ。行かれたら僕が、村人が死ぬかもしれないから一緒に戦つて欲しいな」

ある一点を見つめたまま顔を動かさないで言うハムレット。

「ズドン!!!」

轟音は村の前まで来て、夜の月明かりがその轟音を出している魔物を照らし出す。

「ああ、同感だハムレット。是非とも共闘を願う」

その魔物を見てテラも言う。

そして

「ギギヤアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!!」

村に、Aランク魔物”デバース”が襲い掛かった。

夜の東の森の中をトールは走っていた。

「あれはDランクのメタモアフォーズじゃんかよ!」

走りながら後ろを振り向くとそこにはローウルフの姿をした別の魔物がたくさんトールの後を追いかけてきていた。

テラからメタモアフォーズに取り込まれた魔物の話し（勿論体皮が異常に堅くなることも）を聞いたことがあるトールは、すぐにこれがそうだと気付いて逃げていた。

『ハンターたるもの、命あつての物種』

テラにそう教えこまれているトールはすぐに倒せないと判断し、いまこうして走って逃げていた。

そして冒頭部分に戻る。
走る。

走る。走る。

走って、走って、走る。

「はあっはあっはあッ……」

半月の夜。

月の光があまり届かない森の中を走り続ける。

「はあっはあつくそッ！ はあっはあッ……」

今、夜の森の中を満たす音は、風の音、風で揺れる木々の音、青年が全速力で走る音。

そして、その青年を、二十頭以上の魔物が追いかける音。

「はあっはあっ、な……んでッ」

息も絶え絶えになりながらも青年、トール・アイトスは走り続ける。

彼はフランクの魔物の討伐依頼を受けて、近くの村からこの森に来ていた。

そのはずだった。しかし、

（なんでDランクの魔物なんだ！？）

彼の後を追いかけている魔物はフランクなんかではなく、まさしくDランク。

彼、トール・アイトスでは手も足も出ない。

「はあっはあっ……あッ!？」

夜の森では辺り一帯が暗く、視界が悪いため、地中から這い出ていた木の根に気付かず、トールは足を引っ掛けて転んでしまった。

「はは……う、こりやまずったな……」

後ろを見ると、そこには数多くの魔物が迫ってきていた。

しかし今度はトールの背後から物音がした。

「！」

すかさず振り返るトール。そこには、

「……………トール、大丈夫？」

「カ、カイト！なんでこんなところに?!」

「……………トールが心配で」

そう言ってる間に、魔物はもうすぐそこ、トールとカイトの目の前に来ていた。

「くそっ!!!」

もう逃げられないと判断したトールは剣を抜いてせまりくる魔物に向ける。

(せめてカイトだけでも逃がさないと！)

「カイト、オレが囿になる！早く逃げて！」

「……………やだ」

もうすでにツール達に追いついていた魔物達は彼等を取り逃がすまいと囿みはじめた。

「囿まれてたまるか！」

すぐに魔物の狙いに気づきそうはさせまいとするツール。

「いまならまだ囿まれてない！早く逃げてカイト！」

「……………やだよ」

魔物達を剣で斬れないが剣の腹で当て、吹っ飛ばすツール。しかしそれと同時に襲い掛かる魔物の牙を弾かなくてはいけない。そう長くは持たない。

「逃げるなら今しかないんだカイト！だから」

「やだよ！……！」

カイトの悲痛の叫び。それを聞いたツールは思わず剣を動かしていた腕を止め、カイトを見る。

カイトは泣いていた。

「せつかく！せつかくこの村に来てから初めて仲良くなれたんだ！」

「カイト……」

「……死んじゃうなんて許さない！！絶対逃げない！！」

カイトらしからぬ感情的な言葉に思考を欠いてしまったトール。故に、

「ガウツ」

「く！……しまっ……！」

トールに向かって飛び掛かる魔物。トールはそれを咄嗟に剣でいなしすが、無理に体を捻って防いだために転んでしまった。

そこ今だといった様子で飛び掛かろうとする魔物。

（ここまでか……）

トールは死を感じ、来るであろう痛みに思わず目を閉じた。

しかし、いつまでたっても痛みが襲い掛かってこない。

恐る恐る目を開けてみると、目の前の魔物達はトールに向かって跳び上がる直前のまま止まっていた。

恐怖の表情を顔に貼付けて。

(どづいつことだ…！？)

魔物はトールを見ていなかった。トールより後ろを凝視して恐怖していた。

トールは魔物が見ている方を向く。

そこには眼を”紅く”したカイトが覇気を纏わせ立っていた。

(これはあの時の！)

「去れ」

カイトの声に魔物は体を震わせる。

「トールを殺したら、赦さない」

カイトの声にじりじりと身を引く魔物。

「……………去れ！」

再び眼を紅くしたカイトが言った。

その馬鹿げた巨体から生えている六本の腕から繰り出される連撃を避ける。がら空きになっていくデバースの腹にお返しとばかりに連斬を加えるテラ。しかし歴戦の経験からなのか直ぐに腕を寄せて守るデバース。

「なかなか強いね」

「ああ、やはりSランク並のデバースだ」

ハムレットの分析に頷くテラ。

デバースはその凶暴さから格上のSランクの魔物にさえ闘いを挑むことがある。そして倒してしまうことさえもだ。その時点でそのデバースはSランクに格上げになる。今テラが戦っているデバースの強さもそれだった。

「そっちは終わったか、ハムレット？」

「おかげさまでね。君がデバースの注意を引き付けている間にメタ

モアフォーズは全滅させることができたよ。だけど…」

そう言つてデバースを睨むハムレット。

「あとはこいつをどうするかだね」

「ああ。だが……」

怪訝な顔をするテラに、ハムレットはどうしたと聞く。

「あのデバース……。何かに怯えている様な……。それにさっきから動きが泊まっている……。？」

そう。ハムレットが来た辺りからデバースは動きを止め、まるで何かに怯えているように体を震わせていた。

確かに、とハムレットが呟く。

（しかもさっきほど意識がこちらに向いていない。あいつは何処を見ている？）

テラはデバースの視線の行く先を辿る。そこにあるのは東の森のみである。

（森の中に何かにいるのか？それとも……！！！）

東の森の中から出てきた人影に気付いたテラ。その二人はツールとカイトであった。

（二人とも無事だったのか！！）

半ば二人が死んでいると思って絶望していたテラは喜んだ。が、それ以上に不可解なことがあった。

（何故生き残れた？それにカイトのあの紅い眼は……）

トールは直ぐにテラとハムレットを見付けると駆け寄って来たが、あろうことにカイトはデバースに走り寄っていった。

「師匠！」

「馬鹿弟子！何をしている、早くカイトを止め……?!」

デバースに殺されるぞと言葉を続けようとしたテラはそれが間違いであることに気づいた。

デバースにある程度まで近付き、走るのをやめ歩み寄るカイトの事を、怯えた表情で見るデバースの光景がそこにはあった。

「出ていけ」

さっき話しをした時とは全然違う声音で喋るカイトにテラは驚く。

「ギ……ギ……」

呼吸すらままならないほど追い詰められた様子のデバース。カイト

が一步近寄る度にデバースは一步退く。

「この村から……」

歩みを止めデバースの前に立ち、カイトは大声で言った。

「出ていけ！！！！」

そして

「ギヤアアアアア！！」

デバースは逃げて言った。

「……どうということだツール」

信じられない光景を間近で見たテラはツールに問う。

「……分かりません。でもオレはカイトのあの力に助けられました。今俺が生きて師匠の前にいられるのもカイトのおかげです」

「……そうか、彼に感謝しないとだな」

テラとツールは一人立ったままにいるカイトの所に行く。

「カイト、大丈夫？」

「……トール。……うん大丈夫。ちょっと疲れただけ」

そこでカイトはテラを見て

「……トールのお師匠さん、大丈夫？」

「ああ大丈夫だ、助かったよ。それに弟子を助けて頂き、ありがとう」

テラはカイトに対して頭を下げる。

それにカイトは首を横に振り、

「……ううん、僕もトールに助けてもらったから」

そうして話している時だった。

「あ、悪魔だ！やっぱりあいつは悪魔だ！」

先程のカイトがデバースを村から追い出した一部始終を見ていたのか、村人がカイトを指差し、そう叫んだ。

「あんなデカイ魔物が逃げていったぞ！あいつは悪魔だ！！」

その声に家の中に逃げていた村人達が外に出て騒ぎはじめる。

「あの子が魔物を?! やつぱり!!」

「先日の村が壊滅した原因だってきつとあいつだ!」

「あいつがいたら村が魔物に壊されるぞ!」

「出ていけ!!」

「そっだ出ていけ!!」

次々と話しが広がり、カイトに村人からの罵詈雑言がとぶ。

「ま、待てよ! カイトは村を救っ……!」

トールは村人達に抗議しようとして声を荒げかけたが、いつの間にか後ろに立っていた村長に肩を掴まれ遮られた。

トールは村長に言う。

「村長、どうして止めるんですか! カイトは彼等を、村を救ったんですよ?! それをちゃんと説明すれば」

「分かってはくれないだろうね」

「な……?!」

「カイトは君達に来る前から悪魔と呼ばれていた。そして今こうして事が起こり、カイトが魔物を追い払った……いや、彼等の目には魔物がカイトを見て逃げたと映っただろうね。村人達はカイトのことをどう思う?」

村長の正論に、トールは言い返せなかった。

「それでもオレは……」

「残念だけどトール君……それが人だ」

トールはカイトを見る。自分が罵詈雑言を浴びているのに動じていないように見えるカイト。だが、そう見えるだけだ。トールにはカイトが心で泣いているのが痛いほど分かった。

だから、

「師匠、カイトを地方都市”パース”に連れていきませんか？」

「トール……」

トールの言葉にテラは驚いた。

「オレは弱いです。今回だって何もしちゃいない。カイトだって守れない、逆に今ここにこうして入れるのだって、カイトのおかげです。そのカイトがこんなところにいるなんて……オレには……」

「……」

トールの言葉に、テラは黙ったままにいる。

「僕からもお願いするよテラ」

「……村長さん？」

「こうなってしまった以上、カイト君を村に残すのは村長としての立场上無理だからね」

そして今度はテラにだけ聞こえるように、

「……カイト君の”絶対属性”のこともあるからね」と言った。

「……カイト、お前の意見が聞きたい。お前はとうしたい？」

黙っていたテラはカイトに質問する。

「……僕もツールといたい。一緒にいたい。」

カイトは小さく、それでいて意思を籠めて言った。

「そうか……。」

そこでテラはツールを向き、

「ツール、人の一生は重い。人が計れないほどにな。それを支え背負う覚悟は、カイトを背負う覚悟はあるか？」

「…ある、あるに決まっています！」

テラの問いに、ツールは力強く答える。

テラはツールの覚悟を確認すると、

「今日、今すぐにもパーススに向けて発つ。こうなったら早ければ早いほど良い。ツール、お前は先に発つ準備をして村の出口まで行け。3分で済ませろ」

「分かりました！」

そう言ってツールはすぐさま準備をするため宿に行く。

「…さてカイト。別れを言いたい人はいるか？」

いるならいまのうちだぞとテラ。

「……あそこにいる二人に」

そういつてカイトが指差した場所には、カイトの事を心配そうに見つめる老夫婦がいた。二人はカイトの方に寄って来ると、カイト、テラ、村長の顔を順番に見て、悟ったような表情をした。

老婦人が口を開く。

「……村を出ていってしまっんだね、カイト」

「……うん、おばさん……今までありがとう。…おじさんも」

「いつでも戻ってくるんじゃないぞ、誰が何と言おうとここはお前の家なんだからな」

「……うん。……おばさんとおじさんに出会えて、良かった」

そこで老夫婦はテラに体を向けて

「カイトを宜しく願います」

そこにはカイトは慈しむ優しさと別れへの悲しみがあつた。

「……分かっている。カイトは私と弟子のツールが責任を持って育てる」

テラは老夫婦にそう言つと、カイトを見て

「時間だカイト、行くぞ」

「……分かつた」

そうしてカイトは老夫婦と別れ、テラと村を出た。

村の出口に行くと言われた通りに支度を終えたツールが待っていた。

テラがカイトとツールに言う。

「ここからパースまで夜通し走っていくぞ。それなら昼前ぐらいにパースにつけるだろう」

「え、でもカイトは……」

言葉を止め、カイトを見るツール。

「……………僕、そんなに走れない」

カイトは不安そうにテラに向かって言った。

しかしテラはにこやかに笑い、カイトの頭を撫でて、

「大丈夫だぞカイト。だって

……………」

テラはじつくりと溜め

「……………ツールがずっとおんぶしてくれるからな」

そんな、ことを言った。

「は？」

呆然とするツール。

「え？それってつまりオレがカイトをおんぶしてパースミスまで走れ
つてことですか……………?!」

「なんだ、出来ないのか？」

「いや、さすがにそれは……………」

「カイトを背負う覚悟があるんだろ？」

ツールの否定的な態度に、テラはにやりと笑い言う。

「まさか……ないのか？」

「……ありますよ！ええ、背負う覚悟ぐらいありますよ！」
ガバツとカイトの方を振り向くトール。

「カイト、背中に乗って！」

正直あまりの迫力やけくそにカイトが若干引いたの秘密。

（意外と重いな……）

まだ8歳ぐらいのカイトをおんぶし立ち上がったトールは思った。

（……これが人の、カイトの人生の重さか）

そつだ、オレはこれからカイトを支えて生きていくんだ。

「カイト」

背中に抱き着くカイトにトールは言う。

「……何、トール？」

背負っていて顔が見えないカイトに向かってトールは言った。

「これからよろしくな！」

「……………うん…！」

カイトの声は、今までツールが聞いた中で、一番嬉しそうなものだった。

第六話 自作自演劇場『憐れな少年救出短編物語（ギルドサイド）（後編）（後

こんな駄糞を踏んでいただき……間違えた、こんな駄文を読んでいただきありがとうございます！

今回は自作自演劇場の種明かし編をやります。

久しぶりに神様が出て来るよ！！

第七話 「いじいじの舞台裏って言っただけ？」 まあいやとりあえず種明か

ちよくちよく更新！

第七話 うっづの舞台裏って言うんだっけ？ まあいやとりあえず種明か

うっ……うぶ……気持ち悪……

すみません、主演登場早々吐きそうなカイトです。

え？ なんで吐きそうなのかって？

それはですね皆さん、原因はツールにあるんですよ。

ほらあのツールですよあのツール。俺の計画『自作自演劇場〜』
によってあのバーム夫妻がいた村から俺をお持ち帰りしてくれた、
というか現在進行形でお持ち帰りしてくれているツールですよ！

彼が今俺を背中におんぶしているのは分かりますね？

その背中の乗り心地っていうの？ そのおんぶ心地がですね、

ジェットコースターなんですや。

え、意味がわからない？

いや考えてみてよ、皆は知らないと思うけどね村からパーシスまで
成人男性が約二日間かけて歩いて行く距離ですよ。

それを夜通し走って昼前に着くってあんた、どんなチートですか！

さあ出て来い魔物！ このカイトがチート能力「設定」を使って貴様を劇場に必要な操り人形にしてくれるわ！

「くまさんに〜」

ガサガサッ！！

「出会っ……………」

「グアアアアアアアアアアアッ！！」

「ぎゃあああああああああっ！！」

出会っちゃった！！ なんか意気揚々と森のくさん歌ってたら本当に出会っちゃったよ！ くまさんとおおっ！しかも元いた世界の二倍ぐらいでかいし！ なにこれ怖っ！！

「と言つても思ったか糞クマめえええええええ！！」

「グアアアアアアアアアアアア！」

クマからのデカイ図体をフルに使った鉤爪攻撃！

「がしかし！ 設定「スキル 絶対服従」発動、ひざまずけクマさん！！！」

「グアッ?!」

突如として攻撃をやめ、跪くクマさん。

「ふふふ……さあどうしてくれようか……」

「グ…グア……」

俺が近づくと、俺が使った不可思議な力に怯えているのか体を震わせるクマさん。

そんなクマさんの肩に俺はぼんつと手を置く。

「グア……?」

「何もしないよクマさん……。君にも、家族がいるんだろ…?」

「グア……!!」

俺の言葉が分かっているのか、感動している様子のクマさん。

「さあお行きクマさん」

「グア！」

「やばい、俺ちよつと今カツコよくな？」

「ていつかクマさんごときになにやってるんだろ俺……まあいいか。」

「……………よし！」

クマさんがダッシュで俺から離れて行った後、俺はガッツポーズをする。

「やはり設定「スキル」は使えるな……」

さてと、能力の確認は済ませたし、

「次はちゃんとローウルフでも探しますか！」

「そうだね！」

「そしてパパッと調教して！」

「うん！」

「村を襲わせて！」

「おう！」

「俺がその魔物を追い返して強えええつ！！ てところをっってお前は誰だあああ？？！！！」

「気付くの遅え……………！？」

俺はいつまにか目の前で頷いていた人を指差し言つと、そいつは心

底驚いたといった様子で叫んだ。

あれ？ ていうか……

「神様じゃないですか！ どうしたんですか、こんなところに？」

そう俺が言つと、神様は頭をポリポリと掻きながら言った。

「いや〜〜実は

この世界に駄天されちゃった、テへ」

「……きむ」

「ひどいっ……」

第七話 「こつこつ」の舞台裏って言うんだっけ？ まあいいやとりあえず種明か

ちなみに”だてん”の文字はあれであってます！

次で明かされます。

第八話 いろいろの舞台裏って言うんだっけ？ まあいいやとりあえず種明か

携帯で打ってるので更新字数が少ないのは御容赦下さい……すいません！

第八話 「こつこつこの舞台裏って言っただけ？ まあいいやとりあえず種明か

「なるほど、そういうことですか」

モグモグモグモグ

「そういうことなんだよね〜」

モグモグモグモグ

やあみんな、俺と神様は今し方見付けたクマさん（あのクマさんじゃないからね！）を捕まえて丸焼きにして豪快にかぶりついているところだ。

で、食べながら何故神様がこんな場所にいるのかを聞いたところ、

仕方なく俺をこの世界に転生

ノイローゼになってた神様も治り一件落着

と思いきやそのことが主神にばれた！

主犯格であった神様が責任取って駄天：

というこらしい。

……つーかなんていうの？

「馬鹿だな、神様」

「元はと言うと君のせいだからね?!」

おっとそうだった。失敬失敬。

「ていうか駄天て何？ 漢字違くない？」

「『駄目な神様、天界さよならの刑』の略だよ」

「駄目な神様（笑）」

「うぜえ！ というか君、僕に対する口調変わってない?! 二話あたりまでの恭しい口調は何処に言っちゃったの?!」

「黙れ駄目な神様お前はもう神様じゃない駄目な神様略して駄神だいや違う駄紙だちり紙はまだ使い道がある崇高なる紙だがしかしお前はなんの用途も持たないちり紙にさえ劣る駄紙だていうかよくそんなんでも神様になれましたねいや間違えました紙でしたね誰にでもなれますねこです馬鹿です死ねば?」

「ちなみに駄天しても君の能力奪えるぐらいの力はあるからね?」

「しかし主神にばれたとはどういうことでしょうか我等の主たるイ

「エス・神様？」

「……………すごい変わり身の早さだね……………」

「当たり前だ！ 駄天したって言うから神様としての力を奪われてると思っただけだからな！」

「俺は物凄く恭しい態度で神様に接する。」

「本当は君を転生するのは天界の法度に触れていたんだ。でもノイローゼになって仕事をしなくなった神様に堪え兼ねて、原因の君を主神に黙って勝手に転生させたんだ。僕を含めた四人の神達だね。まあそのことが主神にばれて主犯格の僕だけがある程度神の力を抑えられてこの世界に駄天ってわけ。まあ一種の謹慎処分だよ」

「ほえ〜、そうなんですか。なんか神様に悪いことしちゃいましたね俺」

「まあいいよ。あと勝手に転生させた君をどうこうするということはないから安心してね」

「神様の言葉に俺は了解ですと頷く。」

「そこで神様はモグモグとかぶりついていたクマさん肉を食べ終え立ち上がる。」

「まあそんなわけで暇だから君について行こうと思っただけでもいいかな？ 良かったら君の自作自演英雄にも協力するよ」

「いいんですか?!」

目を輝かせて神様をみる俺。

「別に構わないよ、だって君に……興味があるからね」

神様はにこつと笑いながら俺を見てくる。

それに俺は、

「……………そっちの趣味はありませんよ!」

「勘違いしないでよ?!」

「とりあえず、これからどうするの?」

俺もクマさん肉を食べ終え立ち上がると、神様が聞いてきた。

クマさん肉、レアで目茶苦茶美味かったなあ。今度見付けたらまた丸焼きにして食べよ、ミニディラムで。

とか思いながら俺は神様に答える。

「うーん、最初はやっぱりローウルフを見付けて調教ですかね。や

「つば自作自演に欠かせないものですね」

「そうなんだ。じゃ、はい」

ヒュンツ（ 神様が腕をあげる音）

ボンツドサドサ（ いきなり白煙が上がってそこからローウルフが出て来る音）

ポカーン（ いわずもがな俺）

「……………」

「これでいいかな？」

今、俺の前には何が起きたのか分かってないのだろう、首をキョロキョロと動かしているローウルフが二十匹あまり。

俺は口をあんぐりと開けて神様をみる。

「ん、どうしたの？ 早く調教しないの？」

「いやいやいやなんすか今のは、どんなチート?!」

今神様が見せた力に驚く俺。

「いや普通だよこのぐらい」

「何を持って普通と言っているのか分からない!」

「だって僕って元はこの世界の神様だよ？」

「そうだった！　じゃあ納得だ！　あれ、というか力を抑えられてるんじゃないかってっけ?!」

「うん、そうだよ。だから世界を滅ぼしたりはギリギリできないよ。あ、でも国を滅ぼすのは簡単だよ、見たい？」

「見たくない！　ていうかさせるかあ！」

俺が英雄になる前に国が滅びたらたまったもんじゃない！

「つーか国を簡単に滅ぼせたら世界だって簡単だと思っんですけど
!！」

「あれ、そうだね。じゃできるわ世界滅亡」

今俺は確信した。

この神様、本当に駄目でバカでアホだ。

第九話 ころころの舞台裏って言うんだっけ？

まあいいやとりあえず種明か

今度一気に一万字投稿してみたいな、という希望

第九話 こういつの舞台裏って言うんだっけ？ まあいいやとりあえず種明か

俺はチートな神様が勝手に出現させたローウルフを消してもらい、
ごくごく普通のやり方でローウルフを探しはじめた。

そう、足跡追跡だ。

「足跡がこっちに向かってるな……」

今、俺と神様は足跡を辿って森の中を歩き回っている。

ちなみに神様にはチート能力禁止令を出している。

だってチート使ったらつまらないじゃん。

こういつのは過程を楽しむものだからな。

「なーなーカイト、暇だしつまらないし面白くない。能力使ってい
い？」

「駄目です！ 『魔物見つかるかな？見つかるかな？』っていう
遠足とか修学旅行の前日みたいなこの雰囲気楽しいんですよ！」

「いや僕って神だから遠足とか行ったこと無いし……」

「何ッ?!」

遠足に行ったことがないだと……?!

「じゃあ修学旅行みたいなもの……？」

「あるわけないよ、神なんだから」

「何…だと……」

俺は驚いた顔で神様を見た。

小学校の頃の山に行く遠足前日の『カブトムシとかクワガタいるかな？』や、高校の修学旅行の京都行き前日の『京都アニーシヨンはどんなところかな？』などその他諸々の胸を躍らせるイベントを経験していないだと…。

「神様……」

俺は急に不憫に思えてきた神様の肩に手を置き、

「人生、いや神生。生きていれば良いことが」

「あ、でも一週間に一度日曜日だけだけど、休みの日だからみんなで下界バカンスとかしてたよ」

「………ばかんす？」

「主神って創造神のことだけどね、創造神は一週間で創る予定が六日間で世界創っちゃったの。だから最後の一日は休まれたの。それが日曜日。その慣習で天界では、日曜日は一日オフなんだ。だから、みんなで下界にバカンスしに行くの」

「………へえ」

「君の世界の”地球”？ あそこは良いところだよ、特にハワイ！ あそこにバカンスしに行くって言われた時はウキウキしたな。そうか、これを遠足というんだね!？」

「……………」

俺は何も言わず何の反応も見せず無表情で、はしゃぐ神様の肩においていた手をどけ、今度は頭の上に置いた。

「ん、どうしたの？ 僕の頭に何かついてた？」

頭に手を置いてきた いや、頭を掴んできた俺に神様は言った。

「…ええ、神様の頭の中に異常があると思ってますね！」

俺は神様の頭を掴む手に力を込める。

さらに、設定『スキル 握力アップ』発動！ この瞬間、俺の握力は神をも超える！

「くらえや駄神いいいい!!！」

「痛い痛い痛い痛い痛い痛いッ!!！」

「痛くて当たり前だ！ 痛くしてるんだからな！ だいたい下界遠足でハワイ？ ふざけんな、そんなの遠足でもなんでもねえ！」

「いたいいたいいたいいたい!!！」

「くらいな……これは俺の、俺達人類の怨みだ！」

そう言っつて俺は神様を握る手に最大限の力を込める。

次の瞬間、

「ぎゃあああうぼげッ?!」

神様の頭からバキッ！ と嫌な音が響く。奇声を上げた神様はそのままどさつと力無く倒れ込む。

「……またつまらぬものを握り潰してしまった……」

変死体と化してしまった神様に背を向け俺は呟く。

「あんたの犠牲は、無駄にはしない……」

そつだ、神様の死が今の俺を支えているんだ。神様がいたからこそ、今此処に俺は存在するんだ。

「神様のことは忘れないぜ」

俺は空にサンサンと輝く太陽を仰ぎ見る。

「俺の旅は、まだまだ始まったばかりだ！」

完。

「なわけねええっ!!」

ちっ、死んでなかったか。

「あ、神様おはようございます。復活早いですね。というか神様と遊んでいたらローウルフの足跡見失っちゃったじゃないですか」

「そんなことよりもまず謝ろうよ君?! 僕が神だったから良かったもの、常人だったら確実に死んでたよ!?!」

「すみません紙様」

「そっだよそうやって素直に謝れば……あれ? なんか今違くなかった?」

「そんなことないですよーはやくローウルフみつけましょーよー」

「激しく棒読み! やっぱり謝る気0だ!」

「あ、ローウルフ見つけた」

「え、うそうそ何処?!」

「うそです紙様」

「……………」

「すみませんホントです。ほらあそこ」

俺が指差すと、そこには二十匹程度のローウルフが群れを作っていた。

「……………まあいいや、とつとと調教しちよってよカイト」

「了解つす!」

俺は設定『無口な少年』に後付け設定『調教師』を書き加える。すると、俺の手に銀色にきらめくムチが出現する。

設定を書き加えたことによって、俺に対する皆の認識が”無口で調教が上手い少年”（考えてみるとキモいな）になっているだろうが、後でこの後付け設定だけを村に戻るまでに消せば問題無いだろう。

「というわけで行ってきまーす!」

「はいはい行ってらっしゃい」

俺はいつでもよさそうな神様の声援を背に、スキップでローウルフ

の群れに行く。

「ガウツ！ ガルル……」

くふふ…、俺に気付いたか。

不敵な笑みををこぼす俺に、ローウルフの群れは怯える様子を見せる。

「ガウー……」

「ククク、俺に見つかったが百年目。俺の良き奴隷になってくれよ？」

銀色のムチを振り回して言う俺に、ローウルフ達は逃げようとするが、

「逃がすかよ！」

「ギャンツ?!」

いち早く群れの中から逃げようとしたローウルフをムチで叩く。ローウルフはその細いムチからでは想像出来ないほどの力を受け、吹き飛び木にたたき付けられる。

俺は、その様を見て恐怖しているローウルフに向かって言った。

「今日がお前達の命日、そして俺の忠実な犬として生まれ変わる誕生日だ！」

それから一時間、森の中でローウルフの悲鳴(?)が響き渡った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6383v/>

英雄になろう！！（自作自演で）

2011年9月12日01時11分発行